「第7回東アジア人文研究討論会（復旦大学）派遣参加報告書」

京都大学文学研究科博士後期課程2年 谷本 涼

・プログラム内容

本プログラムは、復旦大学、香港城市大学、京都大学の3大学で人文学を研究する博士課程の学生が、各自のテーマで研究発表を行い、分野間横断で議論と理解を深めることを趣旨とするワークショップである。7度目の開催である今回は、上海の復旦大学で実施された。筆者は3度目の参加であり、復旦大学での開催回、ならびに上海への渡航は初めての経験であった。なお今回のワークショップは、人文研究に関する総合的な研究発表の場であると同時に、3大学が合同で実施してきた、京都大学所蔵の歴史資料に関する研究報告会も兼ねている。また、大学内での研究発表のみでなく、巡検も実施された。

・学習成果

今回も通例通り、多様な学問分野における様々な最新の関心事と研究成果に触れることができた。発表の大半は中国語によるものであり、学部生の第二外国語の授業で初・中級程度の中国語の知識しか持ち合わせない筆者には議論がやや高度すぎるくらいはあったものの、各自の専門とする研究分野における問題点やそれに対するアプローチについて知ることができた。人文地理学を専門とする筆者にとっては、ふだん目にしない社会学、中国語学、哲学、歴史学などの諸成果とそれに取り組む同年代の大学院生の活躍は、たいへんよい刺激となるものであった。もちろん、滞在期間を通じての他の参加者とのコミュニケーションや質疑応答も、自らが属する業界内だけでは得られない新鮮な気づきを提供してくれるものであった。今後も、このような分野横断的かつ国際的な研究の場に積極的に参加することを望んでいる。

・海外での経験

様々な生活関連の施設・サービスへのアクセシビリティ上の問題と、それを取り巻く都市・交通の技術・構造・政策の関連性について研究を進めている筆者にとって、近年目覚ましい変化と発展を遂げている、世界有数の大都市・上海での滞在は、その一瞬一瞬に大いに発見があった。また研究発表に付随して、上海に近く中国八大古都の1つに数えられる歴史都市・杭州での巡検も行われ、そちらも学問的・趣味的に興味をそそられる内容であった。都市研究を行う身分として、世界の都市を自らの目と足で知る機会は常に非常に貴重なものであるが、今回は現地学生の知識を存分に活用した案内を受けることができ、ことさら有意義なものであった。

・進路への影響

属する大学は違うといえど、大学院生、研究者という立場に対する思いには、参加者の多くに共通する部分がある。研究内容自体もさることながら、今後のキャリアパスに対する不安や期待、夢について気さくに話をできる機会を得ることができるのは、毎回のことであるが、このワークショップに参加する大きな意義であると感じている。